



Title	初期バークにおける美学思想の全貌：18世紀ロンドンに渡ったアイリッシュの詩魂
Author(s)	桑島, 秀樹
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1246
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	桑島秀樹
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18322号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科芸術学専攻
学位論文名	初期バークにおける美学思想の全貌—18世紀ロンドンに渡ったアイリッシュの詩魂—
論文審査委員	(主査) 教授 大橋 良介 (副査) 教授 上倉 康敬 教授 藤田 治彦

論文内容の要旨

本論文は、18世紀イギリスを代表する美学者にして政治哲学者たるエドマンド・バーク (Edmund Burke, 1729-1792) の美学思想の全貌を、5章に分けて論じるものである。

「序」において、著者は日本におけるバーク思想受容にふたつのバイアスがあったことを指摘する。ひとつはイデオロギー的な色彩のもとでバークが受容されたことである。明治におけるバークの紹介者たちが、「君主統治」をめざす明治の国策に寄与する保守思想という観点からバークを受容した、というのである。次に、バークの美学は常にカントの批判哲学の前段階として見なされ、バーク思想の面目がこのレッテルに隠されてきた、ということである。かくして著者は、バーク思想をこのようなバイアスから解き放ち、とりわけその美学思想をその本来の姿において取り出すことを、目標として掲げる。

第1章は、著者が自らバークの搖籃の地・アイルランドに足を運んで、その伝記にかかる実地調査をおこなったことをふまえて、バークに関する従来の伝記を詳細に検討する部分である。これまで定説となっていた理解も、意外に実証的な裏付けがないことが論証され、伝記作者の側にあるアングロ=アイリッシュの確立という意識が、バークの「虚像」を作り上げてきたことが、指摘される。

第2章は、バークの美学思想の主著となる『崇高と美』のテキストの検討を行い、まずはバークのなかにある「視覚中心主義」ともいるべき傾向を指摘する。しかし、その傾向とともに、バークの崇高論が「触覚」と結びついた感情であることも指摘する。それは、「崇高」を得るために「苦の除去」による歓喜が必要だということを意味し、その精神性のゆえに、「崇高」が「美」よりも優位に位置づけられるという。なお、この第2章には「付論」として、ジンメルの「山岳美学」が論じられ、そこではカント美学への間接的批判の観点も述べられる。

第3章は、バークの「優美」概念にみる感覚主義の傾向を、同時代の風俗画家ウイリアム・ホガースの美学書『美的分析』を通して読み解く。これはバーク美学を、18世紀イギリス社会で醸成されていた美意識との関連で見ようとする意図をもつ。

第4章は、バークの『崇高と美』を「詩画比較論」という観点から読み解くとともに、その崇高論を、古典主義からの脱却の前触れないシロマン主義の黎明と位置づけることを試みる。ここでも「付論」として、夏目漱石の詩画比較論が引きあいに出される。それは、「詩画比較論」という観点を、当時のグローバルな芸術状況のなかで理解する

という意図を含んでいる。しかしながら、漱石のバーク理解もまた不十分であったことを、著者は指摘する。

最終の第5章は、バークの演劇論草稿に着目し、このテキストの成立史にまで踏み込んでバークの演劇、特に「喜劇」の見方を考察する。そして、この作品が「崇高」の見方においてバークの『崇高と美』のそれと異なること、後の『省察』への過渡期にあること、等を取り出す。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来「右寄り」の政治思想という観点からのみ見られてきた、且つカント美学の陰に隠れがちであったバークの思想を、特に「美学思想」に焦点をしぼって、バークの生誕・搖籃の地であるアイルランドとイングランドとの歴史関係や、当時の社会意識にまで踏み込んで、描き出そうとするものである。この観点からの研究は、本邦においても未だなされていないのみならず、特に伝記の部分に関しては欧米の有力な先行研究の訂正までも含む力作である。表題にある「初期における」美学思想とは、「後期」にはバークが政治思想に重点を置いたことを含意するが、同時に、この政治思想に主眼をおいた先行研究が、初期の美学思想を十分に評価し得ないという主張を含む。そして、初期の美学思想から照明し得るバークの感性とアイルランドの出自の意味が、バークの政治思想の理解にも不可欠だという洞察をも含んでいる。

著者がアイルランドで行った実地調査は、著者の論述に実証的な説得性を与えるもので、本論文の着眼点と並んで、高く評価される。

もちろん、論文としての問題点も無いわけではない。もともとバークは体系的な思想家ではなかったとはいえ、その「全貌」を描くにあたって、各章をつらぬく軸が、すこしづやけた恨みを残す。また、バークの美学思想の受容に際して「バイアス」とされたカント美学に関して、著者自身のカント理解ないしカント批評が、もう少し正面に押し出されるべきであった。これは、バーク思想の受容のもうひとつのバイアスである「イデオロギー性」の見地が、明確に指摘されていたこととくらべると、アンバランスでもある。もちろん、カント美学を正面から扱うとなると、テーマの大きさからして「バーク論」の枠を越える恐れもなしとはいえないかもしれない。著者は、この点をカバーするために第二章の付論で、ジンメルの美学を介して、間接にカント美学への批評的見地を述べたのだと理解される。

以上のような問題点は含むとしても、繰り返して言うなら、本論文は本邦におけるバーク研究の重要な空白部分を埋めて、バークの美学思想を克明に描き出すものであり、欧米の先行研究に対しても訂正提案を含むものとして、学界に寄与するところが大きい。

以上の理由から、本論文は博士（文学）の学位にふさわしいものとして認定する。